

現状

- 河川構造物である護岸の点検においては、目視による護岸周辺の変状の確認を行い、変状等を確認した後に、該当箇所をコアボーリングにより護岸背面の空洞化の状況を調査、把握している。
- 現在の調査方法では、表面上の変状が発生するまで空洞の把握ができないため、発見が遅れば重大な護岸損傷につながる恐れがある。
- 早期の空洞化の発見のために、レーダー探査による調査を検討している。

課題1

- 表面の状態から想定した個所の点検を行うため、精度が低い

課題2

- 一般的なレーダー探査の調査深度は、最大1.5m~2.0m程度であり、護岸高さ（4m~5m）に満たない

求める技術・条件

【求める技術】

- 大阪府の管理する護岸高、約5m程度でも探査可能なレーダー探査技術

【条件】

- 最大5m程度の深度でも調査が行えるレーダー探査技術、またはそれに代わるもの
- 現場条件によっては狭隘な箇所もあるため、車載型、ハンディ型などの対応

イメージ

